

ことばという魔法

— <ハリー・ポッター>シリーズにおける呪文の力 —

金子 真奈美

はじめに

“The gift of words is magic. It can turn a beast into a human as surely as the moon forces the werewolf's change.”¹ これは、ファンタジーも手がける童話作家、ジェーン・ヨーレン (Jane Yolen) のことばである。

確かに、ことばには魔法とよぶべき力がある。それをわかりやすいかたちで体現しているのがファンタジー文学であろう。なぜなら、ファンタジー文学はことばを使ってモノやひとを変現させたり、時間の流れをねじまげたり、別世界を発現させたりするからである。J・K・ローリング (J.K. Rowling) の「ハリー・ポッター」シリーズ (*Harry Potter books*, 以下<ハリー・ポッター>) も、そのような「ことばの魔法」が存分に働いている作品だと考える。

1997年にわずかな初版部数でスタートを切った<ハリー・ポッター>は、のちに「ハリー・ポッター現象」とも呼ばれる熱狂的なブームを巻き起こすまでに成長した。<ハリー・ポッター>のことばの魔力にかかった読者が世界中にいて、その数が決して少なくはないことも知られている。

本シリーズは社会現象となったため、コマーシャルイズム、映画化、ファンサイトなどの原作をとりまく副次的な要素——いずれも副次的とはいえないほどに<ハリー・ポッター>を考えるうえで重要な要素ばかりではあるのだが——と絡めて評されることが少なくない。そこで、本稿は、<ハリー・ポッター>のテキストに焦点をあてて、本シリーズをファンタジー文学作品として評価することを目指した試論である。

以下、<ハリー・ポッター>に描かれた呪文に注目して論じていく。呪文に着眼するのは、それが本作品で描かれた魔法のなかでも特に力強く働いていて、作品に大きな力を与えていると考えるからである。

「呪文」のもつことばの(魔)力に迫ることにより、作品を紡ぐことばの(魔)力をあぶり出す。それが本稿のねらいである。

1章 <ハリー・ポッター>における魔法使いの特性

呪文について考えるにあたり、まずは魔法を実行する「魔法使い」に目を向けたい。はじめに、「魔術師（魔法使い）」ということばの語義を踏まえるところから出発することとする。

1.1 生まれながらの魔法使いたち

本作品で使われている wizard（魔法使い）² という単語は「賢い」という意味をもつ wiz ということばから派生したもので、*Oxford English Dictionary* (Second Edition) をひくと wise man（賢者）と同義であると定義されている。ローズマリ・エレン・グイリー (Rosemary Ellen Guiley) によると、wizard はかつてヨーロッパのあらゆる村や町にいて、運勢の占いや失踪者の追跡などの多様な業務を引き受け、土地の人々から尊敬されるとともに恐れられる存在であったという。³ Wise man としての技をもって畏怖の対象となっていたということであろう。

Wizard ということばの初出は 1440 年だとされているが、魔術そのものは先史時代から使われている。魔術は人類とともに誕生したと指摘するリチャード・キャヴェンディッシュ (Richard Cavendish) は、魔術とは、「人、自然、そして神に対し直接的、自然発生的影響をおよぼすと信じられているさまざまな行為を通じ、力を行使しようとする試み」⁴ であり、それはかつて「自信を支え、繁栄と成功を確保しようとする手段としての積極的役割の他に、自然的悪や超自然的悪への防衛のメカニズムという役割も担っていた」⁵ と述べている。つまり、魔術を司るものは、太古から人間の共同体において大きな影響力をもっていたのである。そのせいか、魔術師は知識に富んでいると見なされることも多かった。したがって、wizard だけでなく、「魔術師（魔法使い）」を表すほかの単語にも、有識者であることが含意されている。たとえば、*Oxford English Dictionary* によると mage は、“A magician; a person of exceptional wisdom and learning” とある。Magician や conjurer は、wizard の同義語とされているため、これらにも wise man という意味合いが含まれることになるであろう。また、cunning man は民間魔術師を表すことばであるが、cunning にも “possessing knowledge or learning, learned” という意味がある。

このような有識者・熟練者としてのイメージからか、フィクションのなかの魔法使いは老齢であることが多い。そんななか、アーシュラ・K・ル＝グウィン (Ursula K. Le Guin) は 1968 年に発表した『影との戦い——ゲド戦記 I』(*A Wizard of Earthsea*、以下『影との戦い』) にて、幼くして熟達者としての魔法使い

の道を目指した少年を描いた。ル＝グウィン⁶は、7歳にして魔法の能力を表わし始めるダニー（のちのゲド）を描くにあたって、つぎのように考えたと言っている。

ごく正統的な元型^{アーキタイプ}としての魔法使いは、ふつう、おそろしく年をとっているか、あるいは不老不死のガンダルフである。しかし、白い髭が生える前の彼らはいったい何者だったのか。疑いもなく深い学識を要する危険な術を、彼らはいかにして学んだのか。若い魔法使いのための専門学校があるのだろうか……などなど。⁶

「疑いもなく深い学識を要する危険な術」をもってひとのできないことを成す魔法使いには、それなりに積み重ねてきた過去があるはずだという考えから創出されたダニー（ゲド）は、段階的な修行を経て成長する魔法使いとして描かれている。

<ハリー・ポッター>にも子どもの魔法使いたちが登場するが、ゲドのありかたとは少し違う。<ハリー・ポッター>の場合は、魔法使いは「生まれながらにして」魔法使いであり、魔力は生得的なものとして描かれているのである。その資質は、主に遺伝によるものだが（作中では、pure-blood（「純血」）、half-blood（「半純血」）などと呼ばれている）、突然変異的に非魔法族である Muggle（以下「マグル」）の家系から魔法使いが生まれることもある（Muggle-born（「マグル生まれ」））。その一方で、魔法使いの一族に生まれながら魔法を使えないものも稀にいる（Squib（「スクイブ」））。いずれにしても、魔法使いとして認識されるのに、知識や技をもっているか否かは判断基準になっていない。この魔法使い像は、上記にて見てきたような本来的な魔法使いのイメージとは異なる。

ただし、これは<ハリー・ポッター>固有の特徴ではない。ダイアナ・ウィン・ジョーンズ（Diana Wynne Jones）の『大魔法使いクレストマンシー クリストファーの魔法の旅』（*The Lives of Christopher Chant*, 1988年）などにおいても、生まれながらの魔法使いは描かれているのである。では、<ハリー・ポッター>の「生まれながらの魔法使い」たちを独特にしているのはどのような点であろうか。

<ハリー・ポッター>において特有なのは、魔法使いたちが「閉じた」コミュニティーのなかで暮らしているということである。彼らは、「魔法界」と呼ばれる独立した共同体を形成して、そのなかでマグルと入り混じることなく生活している。すなわち、<ハリー・ポッター>の魔法使いたちに備わっている生得的な資質は、その「魔法界」に入るための「パスポート」なのだと解釈できるのである。

もちろん、単なるパスポートにすぎない、ということではない。魔法使いたちが wise man としての資質を生得的にもっていることに、どのような意味を見出すこ

とができるかという点については、のちほど論じることとする。

まずは次節にて、魔法使いが独立した共同体を形成することの意義について考えたい。

1.2 独自の社会で生きる魔法使いたち

魔法界にある Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry (「ホグワーツ魔法魔術学校」、以下「ホグワーツ」) の鍵の番人である Hagrid (ハグリッド) が、魔法省について説明する際に、“‘Well, their main job is to *keep it from the Muggles that there's still witches an' wizards up an' down the country*’”⁷ (強調、筆者) と述べていることが、魔法界の閉鎖的な性質を端的に表しているであろう。

前節で述べたように、歴史をふりかえると、魔術師は人類の共同体で力を発揮してきた。言い換えるならば、魔術師は人間社会のなかで特殊な能力を発揮してこそ、その存在価値を示すことができることになろう。文学の上でも、魔法使いは人間(またはそれに類するもの)の社会において、己の能力を活かして地位を保っている。

では、<ハリー・ポッター>にて、魔法使いたちの世界が「別世界化」されていることにはどのような意味があるのだろうか。

この問いに答えを得るべく、ホグワーツの教育システムに目を向けたい。

フィクションに描かれた魔法の学校では、しばしば個別指導が行われる。たとえば、『影との戦い』のロークの魔法学院では、飲みこみの早いゲドが「あれを教えろ、これを教えろと厚かましくせがむように」になると、「長は嫌な顔ひとつせず、いつでもゲドの要求にこたえてくれ」⁸る。また、デブラ・ドイル (Debra Doyle)、ジェイムズ・D・マクドナルド (James D. Macdonald) の『サークル・オブ・マジック 1—魔法の学校』(Circle of Magic) の魔法の学校では、「はじめの二年近くは授業に出て、基本的なことをひとつとおろし習う。それから進級試験があって、それに通ったらいよいよ一人の先生について指導を受ける」⁹のである。どのような教育体系を繰り広げるかということは、生徒の卒業後をどのように見据えているかということにかかってくるであろう。

そもそも、魔法の学校とは、通常魔法のプロを育てる専門教育機関である。たとえば、ロークの魔法学院では課程を修了すると「正式の魔法使いの資格」が得られる。また、魔法学校を舞台にした冒険物語の *Wizard's Hall* (Jane Yolen, 1991年) では、すべての課程を終えたものは魔術師 (wizard, enchanter) になれる。また、黒魔術の学校を描いたダークファンタジー作品の *Groosham Grange* (Anthony Horowitz, 1988年) は、妖術師 (witch) を育成することを目的としている。

その点 Hogwarts は独特である。将来のことを考え始めなければならない年齢になると、ハリーがロンとハーマイオニーに“‘D’you know what you want to do after Hogwarts?’”¹⁰と聞いているように、生徒たちは「魔法魔術学校」に通いながらも、卒業後は社会に出て「就職」するのである。魔法使いと魔女が構成する魔法界という独立した共同体のなかで生きていく以上、「魔法使い・魔女」という職には当然つけないのである。

したがって、Hogwarts の教育は、生徒たちの就職に向けて画一的、そして、システムティックに進められていく。

この Hogwarts の教育のありかたが、魔法界の「魔法」のありかたを体現していると考える。魔法界とは、魔法を扱う機会が住人に均等に与えられた世界である。そこでは、生存していくうえで魔法が絶対的なものとなっている。もし、マグル界を舞台としていたならば、魔法はマグル界のテクノロジーなどと比べられて相対的なものとなったであろう。しかし、〈ハリー・ポッター〉は、マグル界を物語の「枠」として外に追いやることにより、枠の「内側」の世界を、特殊でありつつ、揺るぎのない安定したものとしているのである。

魔法が絶対化された世界。そこでは、魔法がどのようなものとして描かれているのであろうか。この点については、次章にて考えていきたい。

2章 〈ハリー・ポッター〉における魔法の特性

前の章にて、魔法使いは従来学識と結びつけられてきたことを踏まえ、〈ハリー・ポッター〉では、魔法使いとしての資質は生得的なものであり、従来の魔法使い像とは異なることを述べた。また、その魔法使いたちが、閉じたコミュニティのうちに暮らしていることも〈ハリー・ポッター〉の特徴だと論じ、別世界化された魔法界では、生活していくために必要なものとして魔法が絶対化されているのだと論考した。

そこで本章では、魔法界の全員が使う魔法とはいかなるものかを、Hogwarts の授業に注目することにより考察していく。

なお、Hogwarts に着目するのはつぎの理由による。〈ハリー・ポッター〉では、Hogwarts の教えによって魔法使いが一人前になるのであり、その教育内容を踏まえることにより魔法界の魔法の全貌をつかむことができると考えるからである。ハグリッドがいうように「みんなが Hogwarts で一から始める」のである。基礎的な魔法の一から百までを見せてくれるのが Hogwarts である。

2.1 「外的」な魔力と「内的」な魔力

ホグワーツでは、専門性のある授業を豊富に取り揃えている。作中で授業の内容が紹介されているのは、Charms (「呪文学」)、History of Magic (「魔法史」)、Care of Magical Creatures (「魔法生物飼育学」)、Herbology (「薬草学」)、Transfiguration (「変身術」)、Potions (「魔法薬学」)、Defence Against the Dark Arts (「闇の魔術に対する防衛術」)、Astronomy (「天文学」)、Divination (「占い学」)である。

これらの授業は大きく三種の科目に分けることができると考える。

ひとつめは、授業に魔法が関わらないものである。これに該当するのは「魔法史」、「占い学」と「天文学」である。「魔法史」は、書物や担当教師の話を通じて学ぶ授業である。教師がゴーストであること以外に超自然的なことはなく、授業の形態はマグル界の歴史の授業と変わりが無い。「占い学」は、未来の出来事を予知し、その良し悪しを見極める目を養う授業である。しかし担当教師の方法論に信憑性はなく、生徒に予知能力が育っている兆候も見られない。「天文学」は、星や惑星の動きを勉強する授業で、魔法には関係がない。

ふたつめは、魔法界特有のもの(植物、生物、薬品など)について学ぶ科目である。「魔法生物飼育学」、「薬草学」と「魔法薬学」がこれに該当する。「魔法生物飼育学」は半鳥半馬の Hippogriff (「ヒッポグリフ」)など、魔法界特有の生き物の生態や飼育のしかたについて学ぶ授業である。取りあげる生物はマグル界にはないものばかりだが、扱う際に魔法は必要としない。魔法界独特の植物の育て方を学ぶ「薬草学」も同様である。植物そのものは魔法界特有のものばかりで危険なものも多いが、それらを扱うのに魔法は不要である。魔法薬の調合について学ぶ「魔法薬学」も、“there is little foolish wand-waving here”¹¹と担当教師が言っているように、魔法は使わない。

三つめは、魔法を実践する科目である。「呪文学」、「変身術」と「闇の魔術に対する防衛術」がこれに該当する。「呪文学」は文字通り呪文を学ぶ授業、「変身術」は呪文を使ってもものの姿を変える技を学ぶ授業、そして、「闇の魔術に対する防衛術」は、邪悪な魔法に対する自己防衛術を学ぶ授業で、ここでも呪文を使っている。

上記を踏まえると、魔法界の魔法は二種類に大別できると考えられる。ひとつは、魔法界特有の「もの」(これらの「もの」には薬品や植物も含む)の魔力を使用する方法で、もうひとつは自らが呪文を唱えて魔法をおこす方法である。

魔法界特有の「もの」は、「もの」自体に魔力があるため一種の「呪物」として捉えることができると考える。「呪物」について示唆を与えてくれるのは、ウラジ

ミール・プロップの、昔話における「呪術的援助者」についての考察である。下記の引用文を参照されたい。

昔話は呪的手段を主人公の手に渡しクライマックスに達する。(中略) これ以降は主人公はまったく受動的役割を演じる。彼の援助者が彼に代わってすべてを遂行するか、あるいは主人公は呪的手段の援助で行動する。(中略) 援助者の検討は呪物の検討と切り離せない。両者はまったく同じように行為する。¹²

上記の文章は、呪物が「援助者」と同様の機能を果たしていて、その援助を受ける者は「受動的役割」を演じるのだと論じている。このことは、〈ハリー・ポッター〉における「呪物」につき、つぎのように考えさせてくれる。魔法界特有のものは、魔法使いたちに力を授ける「外的」な力なのであると。

一方、呪文は魔法使いが能動的に唱えるものであるため、魔力を自ら繰り出す「内的」な力を必要とする。このことを踏まえると、魔法使いたちが生得的に持っている資質は、呪文を唱えて魔法を実行するためのものだといえるであろう。

魔法使いたちの生まれながらの魔力は、教育を受けるまで隠れているわけではない。たとえば、ハリーは11歳の誕生日を迎えるまで自分が魔法使いであることを知らずに育ったのだが、ホグワーツに通いはじめるまでには「おかしな出来事」がたびたびあった。それは、叔母のPetunia（ペチュニア）に人前に出られないような形に頭を刈りあげられたのに、一晩で元通りになっていたり、従兄のDudley（ダドリー）とその一味に追いかけられ、隠れようとして物かげに飛び込もうとしたところ、はるか上空の食堂の煙突の上に着地していたりと、理屈のつけようのない事件ばかりである。

このようにして、ホグワーツに入学するまで、魔法使いたちの魔力は体内にエネルギーのように温存されていて、ときどき意図せずして表出する。その「内的」な魔法の力をコントロールする役割を負っているのが「呪文」だということになる。魔法使いたちは、規定された文句を発することで、体内に宿っている力を自分が意図した力に変換するようになるのである。

ここでは、ホグワーツの授業を整理することにより、魔法を「外的」な力と「内的」な力の二種類に大別した。そして、魔法使いたちが生まれもつ「内的な力」をコントロールするのは「呪文」なのだという見地にいたった。

では次に、その「呪文」が作中のどのような場面で主に生かされているかという点に目を向けたい。

2.2 世界を守る「呪文」

リサ・ホプキンス (Lisa Hopkins) は、〈ハリー・ポッター〉では学習の重要性が謳われていると主張した論文のなかでつぎのように指摘している。

The importance of all the knowledge that Harry, Ron and Hermione have been acquiring during their first year at Hogwarts is abundantly confirmed when it becomes apparent that the whole of their final adventure is structured as a symbolic test on what they have learned so far:¹³

〈ハリー・ポッター〉の各巻は、ホグワーツでの一年間を描いている。夏休みで幕を開け、たいてい年度末の手前で大きな事件があり、それを乗り切って終業式を迎えるという形式のもと物語が進行していく。大きな事件とは、ほとんどの場合がハリーと、魔法界を脅かす闇の魔法使いである Voldemort (以下「ヴォルデモート」) との対決である。

上記の引用文は、第一巻で描かれたハリーとヴォルデモートとの対決が、一年間で学んできたことに対する“symbolic test”だと指摘した文章である。¹⁴

この指摘は以降の巻にも適用できると考える。それは、戦い・冒険のたびにハリーはロンやハーマイオニーをはじめとする仲間や呪物の力を借りながらも、学校で習得した呪文を「武器」に切り抜けていくからである。

ここで、ハリーとヴォルデモートとの対決にしばし目を向けたい。

上述のとおり、本作の根底にはハリー対ヴォルデモートという善悪闘争の構図がある。これは、科学と権力の問題について論じた C・S・ルイス (C.S. Lewis) のエッセイ、“The Abolition of Man” を参照するとごく自然なことだと考えられる。これにつき説明しよう。

ルイスはこのエッセイのなかで科学と魔法はともに知識の探求という衝動から生じたもので、根幹は同一だったと指摘している。さらに、本来は「真実を探りたい」という知識欲が根底にあったはずの魔術と科学は、つぎのように変化してきたと論じている。

There is something which unites magic and applied science while separating both from the ‘wisdom’ of earlier ages. For the wise men of old the cardinal problem had been how to conform the soul to reality, and the solution had been knowledge, self-discipline, and virtue. For magic and applied science alike the problem

is how to subdue reality to the wishes of men: the solution is a technique; and both, in the practice of this technique, are ready to do things hitherto regarded as disgusting and impious — such as digging up and mutilating the dead.¹⁵

魔術も科学も、現実を人間の意のままに操ろうとするために、節操のない技術を使用するようになったという指摘である。ルイスはこのエッセイのなかで、科学は「自然の征服」(conquering nature)を目指すようになったのだといい、道理(Tao)を失った人間がそのような目的のもとに突き進むと、自然を征服するのではなく、人類を征服すること(つまり、人類を滅亡させてしまうということ)になると警告を発している。これは、人類が人類に対して権力をふるっていることにはかならないという論旨である。そして、魔術は衰退してしまったがまだ使われていたならば同じ道をたどっていただろう、ということを書かせている。

アラン・ジェイコブス(Alan Jacobs)も、リン・ソーンダイク(Lynn Thorndike)の著書、*A History of Magic and Experimental Science*を踏まえて、魔術と科学は、自然環境をコントロールするという共通の目的を掲げて一本の同じ道をたどってきたのだと述べている。そして、時代とともに科学が発展し、魔術が衰退したことを受けて、ローリングが“counterfactual secondary world”を提示したのだと論じている。¹⁶

ルイスやジェイコブスの論を踏まえると、ハリーとヴォルデモートとの対立関係をつぎのように解釈することができる。

修学中のハリーと、常にハリーの背後にいて力を添えるホグワーツの校長であるダンブルドアは、知識を授ける学び舎、ホグワーツを代表している。すなわち、ハリーたちは、本来の wise man としてのありかたを忘れずに生きる魔法使いだと解釈できるのである。ホグワーツが学問を重んじているということは、校歌に盛り込まれた“Just do your best, ... And learn until our brains all rot”¹⁷という歌詞が体现している。¹⁸一方、ヴォルデモートをはじめとする闇の魔法使いたちは、道理に欠け、魔術の本質を顧みることを忘れて悪にまみれ、ルイスが危険視する「魔術の悪しき一面」を体现しているのである。なお、この対立関係はつぎのようにまとめることができるであろう。

別世界化された魔法界では、魔力はすべての人に備わっている。つまり、魔法界に「入国」するものは、誰しも wise man になる資質を与えられているということになるであろう。しかし、その資質を開花させられるか否かはそれぞれの魔法使いにかかってくるということになる。

さて、ハリーは、この闇の魔法使いたちに対抗する自己防衛術を教える「闇の魔

術に対する防衛術」に長けている。それは、ハーマイオニーがつぎのように言っているとおりである。“‘Harry, you’re the best in the year at Defence Against the Dark Arts’”。¹⁹ ハリーは授業を通して、また、担当教師の個人指導を経て、さらに、自習を通じて、吸魂鬼を追い払う呪文 (Expecto Patronum) や、弱い呪いなら跳ね返すことのできる「楯の呪文」(Protego) や、妖怪を追い払う呪文 (riddikulus) などをつぎつぎと身につけ、使いこなしていく。ハリーは、いわば「闇の魔術に対する防衛呪文」の天才として、それらの呪文を掲げ、魔法界、果ては世界を守っていくのである。

次章では、この「呪文」にはどのような力があり、ハリーにどのような力を与えているか、より詳しく見ていくこととする。

3章 呪文のちから

前章では魔法界の魔法を整理し、魔法使いたちに生来備わっている力は呪文により発揮されるということ論考した。さらに、〈ハリー・ポッター〉の根底にひろがる善悪闘争の構造を踏まえ、「善」を代表するハリーが「悪」に対峙する際に呪文を武器としていると述べた。

ここでは、その呪文とはどのような力を発揮するのかという点につき考えていく。まずは、呪文とことばとの関係を探るところから始めたい。

3.1 呪文とことば

『魔女と魔術の事典』では、Spell (この事典では「呪縛」と訳してある) をつぎのように説明している。「呪縛とは、口で唱えるか、文字に書き記す祭文であり、魔術においてはある出来事の流れを起こしたり、出来事のなりゆきに影響を与えることを意図したものといえる」。²⁰ この定義からは、「呪文」には、「ことば」——発語であれ、記述であれ——を用いるのが一般的であることがわかる。

〈ハリー・ポッター〉における「呪文」も基本的にはことばを必要としている。²¹ ここで、本シリーズにおける呪文の特性に迫るために、同じくことばを必要としつつも、〈ハリー・ポッター〉とは性質が異なる呪文を描いた作品に目を転じたい。

ダイアナ・ウィン・ジョーンズの『大魔法使いクレストマンシー 魔法使いはだれだ』(Witch Week, 1982年) に出てくる魔法使いたちもことばを使って呪文を唱えている。しかし、どのようなことばを使うかは重要ではないのである。このことをよく表している文章を引用しよう。

そのときナンは、自分が今までに使った魔法といえば、ほうきで飛ぶことだけだった、と気づいた。どうやって服を変えたらいいのかなんて、見当もつかない。(中略) ナンはふるえる両手をのばし、ちょっぴりでも呪文に似ている文句の中で、最初に頭に浮かんできたものを唱えた。

「イーニー・ミーニー・マイニー・モー、制服じゃない服にしておくれ」

体のまわりの空気が渦を巻いたような感じがした。(中略) そしてあっという間に二人とも、すその長い黒いドレスにとがった黒い帽子、その他一式そろった魔女の装束に身を包んでいた。²²

上記の作品で描かれている呪文は、意味さえ通っていれば、どのようなことばを使っても効くのである。一方、〈ハリー・ポッター〉の場合は、規定の文句を、正確に発することが求められている。呪文に正確性が求められていることは、つぎの引用文がよく表している。これは、呪文学の Professor Flitwick (フリットウィック先生) が、ひと文字間違えて発音しただけで悲惨な結果を招いてしまうことを説明している場面からの抜粋である。

‘And saying the magic words properly is very important, too — never forget Wizard Baruffio, who said ‘s’ instead of ‘f’ and found him-self on the floor with a buffalo on his chest!’²³

また、ロンが ‘Wingardium Leviosa!’ という浮遊呪文を唱えた際、‘gar’ の音の伸ばしかたが足りなかったために羽を持ち上げそこねていることから、ことばを正しく唱えることの厳密性が伝わってくる。

では、ことばを(正確に)発することと、自ら力を行使して呪文を成立させることにはどのような関係があると考えられるのだろうか。

3.2 ことばの力

発話・発語と呪文との関係について考えるときに、ヒントを与えてくれるのが J・L・オースティン (J.L. Austin) が『言語と行為』(*How to Do Things with Words*, 1962年) にて提示している言語行為論である。オースティンは、「文を口に出して言うことは、当の行為を実際に行うことにほかならない」²⁴ という言語の行為遂行的側面を指し示し、それまでの哲学者たちの言語観²⁵ に異を唱えたイギリスの哲学者である。オースティンは、「何かを言う」ということは、つぎの三種の行為を遂行することだと述べている。ひとつめは、「一定の音声を発すること、一

定の構文の中で一定の単語群を並べること」²⁶によって意味をもつ発語をするという「発語行為」。たとえば、「彼女を射て」といった場合、「彼女」という特定の人物を「射る」ことを要求するという意味内容を発語する行為のことである。²⁷ ふたつめは、発語が命令、警告、受領などを実行する力をもつという「発語内行為」。たとえば、「彼女を射て」と発語することにより、「彼女」を「射る」ことを命令、あるいは、助言する行為のことをいう。そして、三つめが、「何ごとかを言うこと」によってある一定の効果を達成する²⁸という「発語媒介行為」。これは、「彼女を射て」と命じられた人物がその発語を受けて「彼女」を「射る」行為を指す。

「呪文」を唱えるということも、上記のとおり行為遂行的だと考えられるのである。²⁹ 呪文が飛び交う下記の場面を例にとりて、この考えを具体的に示したい。

Harry saw the knees of the Death Eaters bend; ... he shouted,
'STUPEFY!'

...

Neville overturned a desk in his anxiety to help; and ... he cried:
'EXPELLIARMUS!'

...

'STUPEFY!' screamed Hermione, who had just caught up with them.

...

'Accio wand!' cried Hermione.³⁰

これは、ハリーをはじめとするホグワーツの学生たちと、闇の魔法使いたちが魔法省で繰り広げた戦闘シーンからの抜き書きである。では、上記にて使われている呪文を言語行為論に照らし合わせて考えてみよう。

<ハリー・ポッター>に出てくる呪文には、英語、ラテン語、ギリシャ語、などを使用・参照・変形しているもののほかに、ローリングの造語もある。しかし、それぞれ意味を成すものとして形成されている。たとえば、上記の *stupefy* は、「麻痺させる」、「ほうっとさせる」という意味をもつ英単語で、*accio* は「呼び寄せる」という意味をもつラテン語、そして、*expelliarmus* は、「追い払う」、「排除する」という意味をもつラテン語の *expello* と、「武器」という意味をもつ同じくラテン語の *arma* を貼りあわせた造語である。(呪文の意味は、文脈から推測できるようなもなっている。) 上記にて引用した場面では、ハリー、ネヴィルとハーマイオニーがこれらの呪文を発することにより、それぞれ攻撃に成功している。それは、つぎに示すとおりである。まずハリーが '*Stupefy*' という呪文を発するとそれを受

けた闇の魔法使いが倒れ、ネヴィルが 'Expelliarmus' と叫ぶと、ハリーとつかみ合っていた男の手から杖が吹っ飛び、ハーマイオニーが 'Stupefy' と唱えると敵の男が杖を構えたまま硬直し、また、'accio wand' と叫んだことによって、ハリーの手を離れてしまった杖がハーマイオニーの手に飛んで戻ってきているのである。こうして、これらの呪文は正しく発音することによって意味のある言葉として発せられると同時に、しかるべき力を対象に行使し、そして、その結果として効果が得られている。このように、「呪文」として発せられたことばは三種の「行為」を「遂行」しているのである。

先に述べたように、作品により「呪文」の描かれかたはさまざまである。〈ハリー・ポッター〉の場合は「定型の文句」を「正確」に発音してこそ、効果を発揮し得る。この設定は、行為遂行の确实性という観点から考えると、有意義なものと思われる。このことは、野家啓一が指摘しているような、「言語行為論」の孕む問題点を参照すると明らかになるであろう。野家は、「オースティンの言語行為論は、しかしながら、聞き手の「意味理解」という観点から話し手の行為を記述するという手続きで一貫しており、そこには話し手と聞き手の間の相互行為あるいは相互作用という視座が欠落していると言わねばならない」³¹と指摘し、聞き手側の主体性が視野に入っていないことを問題視している。さらに、聞き手が話し手の期待どおりに反応をするのは、聞き手が話し手の発言に対して相応の応答をしてこそのことだと述べ、言語行為とは本来「話し手と聞き手の双方がその遂行に責任を負う双務的 (reciprocal) な行為」³² なのだといっている。この指摘により、つぎのことを考えさせられる。〈ハリー・ポッター〉の呪文は、魔法界共通の定型の文句で、コンセンサスのとれたことばであるからこそ、确实な実行力があるのである。このようにして、〈ハリー・ポッター〉の呪文は確かに行為を遂行し得る「力」のあるものとして構築されている。

つぎの引用文が示すとおり、マシュー・ディッカーソン (Matthew Dickerson) も、〈ハリー・ポッター〉における呪文はことばの力を表しているのだと述べている。さらに、「ことばの力」というものは聖書が説いていることなのだと言っている。

Yet another type of magic is the magic of words. Spells work because words have power. We see this throughout Rowling's books. And it is a teaching not only consistent with, but *fundamental to* Christian scripture. God created the world, we are told in Genesis 1, through language. He spoke and it happened. He is a God of language, and for him language is power. If humans are created in God's im-

age, as the author of Genesis so clearly states, then we must assume that humans also are endowed with the power of words. ... To use the symbolism of Faërie, blessings and curses are a sort of magic—a power that the Creator endowed the created beings with. Rowling illustrates this clearly through the power of spells.³³

天地創造が「ことば」をもってなされたことに「ことばの力」を見出し、世界を興した神に創造された人間もその「ことばの力」を授かっているのだという指摘である。

ことばの力と『創世記』との関係については、キャヴェンディッシュの著書にも言及がある。キャヴェンディッシュは、「そして神は言われた。『光あれ』と。すると光ができた」という文章を引用して、つぎのように述べている。「言語も、…〔魔術の〕力を引き出す道具だ。『創世記』の第一章に神は命令の言葉を口にすることで世界を創造されたと記されている」³⁴。天地創造という大業が「ことば（発言）」によって行われたことを記す『創世記』には、確かに「ことば（発言）」の「力」と「行動力」が謳われている。そして、ディッカーソンが述べているように、ひとはみな、その力ある「ことば（発言）」を授けられてこの世に送られているのである。しかし、日々の営みのなかで無数のことばを発するうちに、そのことに無感覚になりがちであろう。〈ハリー・ポッター〉に描かれた呪文は、そのような人間—マグル—に、ことばには「行為を遂行」する「力」があるのだということを再認識させてくれる。そのことばの「力」とは、世の起源に関わるものとして『聖書』に刻印されているほどの重大なものなのである。

ここまで論考してきたことを踏まえ、〈ハリー・ポッター〉が表現しているのはつぎに示すことだと考える。

「呪文」を伴ってこそ発揮される「内的」パワーをもった魔法使いたちは、「ことば（発語・発言）」をさずかって生まれてきたマグルそのものを表している。そして、本シリーズは「呪文」の力・行動力を善悪闘争などを通じて強調することにより、「ことば（発言）」の力を力強く表現しているのではないだろうか。階段下の物置に押し込められて発言権を与えられず、質問をすることすらも許されず、半ばことばを奪われてきた少年ハリーは、呪文（＝ことばの力）を使いこなせるようになることによって多数の闇の魔法使いに立ち向かい、凶悪なヴォルデモートを打ち倒し、世界を救うヒーローと化している。本作品は、この劇的な変化を通して、上記のことを圧倒的なダイナミズムとともに伝えていると考える。ハリーは、「選ばれしもの」³⁵として、傷だらけになりながらこのことを体現しているのである。

さて、上記の考えにいたるにあたり、問題点がふたつ残されている。ひとつは、

いかにして、ハリーの放つ呪文が闇の魔法使いの唱えるものに対して優位性を獲得しているのかという点である。もうひとつは、コンセンサスの取れた定型の文句を唱えても、呪文が思うように働かないことがあるが、それをどのように解釈できるかという点である。

これらの問いについては、〈ハリー・ポッター〉の魔法使いたちが呪文を発するときには「杖」に注目することにより答えを得たい。

3.3 呪文と杖

魔法使いには杖はつきものである。しかし〈ハリー・ポッター〉における杖は、独特な性質をもっている。魔法使いが杖を入手するためには杖職人がつくったものを専門店で購入しなければならないのだが、購入者が品物を選ぶというよりは、杖が持ち主を選ぶのである。ただし、杖職人の Ollivander (オリバンダー) が、杖と持ち主を 'perfect match' (ぴったり合う) と形容していることから、杖が一方的に持ち主を選ぶというよりは、杖と持ち主が惹きあうのだといえるであろう。自分にぴったりの杖は、魔法の力を最大限に発揮してくれる。ほかの魔法使いの杖を借りても同様の効果は得られないのである。

このように〈ハリー・ポッター〉固有の杖のありようには、「杖」が本来もっている「力」と「慧眼」という象徴性³⁶が込められていると考えられる。

どのていどの「慧眼」=洞察力をもっているか、どのていどの「力」をもっているか、ということは、ひとによって異なるであろう。だからこそ、杖も持ち主によって一本一本ちがっているのだと解釈できる。また、「慧眼」や「力」は自己完結的に育つものでもなく、外界からの影響と自分の資質とがあいまって培われるものである。杖と持ち主が惹きあうのは、このことの表れだと考えられる。

上記の考えにのっとり、ハリーが自身の杖から放つ呪文に注目すると、彼が人一倍鋭い洞察力と、その洞察力によって引き出せる強い力を持っていることがわかる。それは、次に示すことに表れている。

魔法界には、魔法省が使用を禁じている unforgivable curses (「許されざる呪文」) が三種類ある。いずれも危険な呪文で、秩序を揺るがしたり、ひとの命を奪ったりする危険性をはらんでいる。ヴォルデモートをはじめとする闇の魔法使いたちがさかんに使用する呪文で、強い思いを込めないと効果を発揮しない呪文である。ハリーは、15歳のとき、窮地に追い込まれて許されざる呪文の一種類である 'crucio' (「苦しめ」) をヴォルデモートの一番の手下である Bellatrix (ベラトリックス) に向かって唱えるのだが、相手に大した打撃を与えることができない。そのとき、ハリーがベラトリックスに言われるのが、つぎのことばである。

‘You need to *mean* them, Potter! You need to really want to cause pain—to enjoy it — righteous anger won’t hurt me for long – I’ll show you how it is done, shall I? I’ll give you a lesson —’³⁷

上記を参照すると、ハリーは相手を苦しめるという行為の残酷性を見抜くだけの「洞察力」をもっていたからこそ力も発揮できず、呪いの呪文を働かせることができなかったのだと解釈できる。

ハリーの本質を見抜く鋭さとあいまって発揮される「力」の強さは、ハリーが、いかなる危機的な状況にあっても、基本的に「自己防衛」呪文で窮地をしのぐことにも表れている。ハリーは、許されざる呪文をつぎつぎと放つ闇の魔法使いを相手に武装解除の呪文ばかりを使うため、ルーピンに“‘Harry, the time for Disarming is past! These people are trying to capture and kill you! At least Stun if you aren’t prepared to kill!’”³⁸とたしなめられているほどなのである。

ところが、ハリーは相手が放つ残忍な呪文に対して攻撃力の弱い呪文で応戦してもその場をしのげるのである。痛めつけ合うことの意味を鋭い眼で見据えたうえでハリーが選んで放つ呪文に、杖は最大の力を降り注いでくれるのであろう。

ダンブルドアは、最終巻でハリーに“‘what quality it was in you that had made your wand so strong’”³⁹と言っている。その quality とは、慧眼=本質を見抜く鋭い洞察力と、そのような洞察力と協調しながら働く強大な力なのではないだろうか。

ことばには力がある。だからこそ、何を見据えて、どのような力を発揮するかということが重要だ。ハリーが自分の杖をもって発信する呪文からは、そのようなメッセージが聞こえてくる。

おわりに

本稿では、〈ハリー・ポッター〉における呪文の描かれ方を以下の手順で考察してきた。

まず、〈ハリー・ポッター〉の魔法使いは「生まれながら」にして魔法使いであるという点と、彼らが独立した共同体で生きているという特徴につき述べ、彼らが均等に魔法を扱う機会を与えられ、魔法が魔法使いたちにとって生活に欠かせない絶対的なものとして描かれていることを踏まえた。つぎに、魔法界における魔法は、「呪物」という「外的」な力と、「呪文」という「内的」な力の二種類に大別できると論考し、魔法使いたちが生得的に与えられている「内的」な力は、「呪文」によって発揮されるのだということを導き出すことにより、当シリーズが描く魔法に

おける「呪文」の特異性をあぶり出した。さらに、〈ハリー・ポッター〉に描かれた呪文とことばとの関係を踏まえ、「呪文」を通じて「ことば（発言）」の力が表現されているのだという結論に達した。そして最後に、「杖」がそれぞれの魔法使いの洞察力や力を外在化させたものとして呪文に働きかけ、それが呪文の強弱につながるのだということ述べた。

クレア・アーミットステッド (Clair Armitstead) は、〈ハリー・ポッター〉における魔法について、つぎのように述べている。“Magic isn’t something that divides children from their elders and betters ... it is a skill to be studied, which — if well-learned — will give children adult advantages.”⁴⁰

これまで考察してきたことに上記のことばを重ねて、つぎのように本稿をまとめたい。

ことばは語る主体を選ばない。つまり、ことばの前ではひとはみな同等なのである。魔法界に入る資格を持って生まれたハリーたち同様、ひとはだれしも「ことばという魔法」を扱う資格をもっている。ことばは、正しく、その場にふさわしい思いを込めて発したならば、魔法のような力を発揮することができるのである。ハリーを筆頭とする魔法使いたちは、そのような「ことば（発言）の魔力」を体現している。

ローリングは、上記のことを描くことにより、ことばのもつ力の一面を見事に描いて見せたと言えよう。

最初に提示した目的に立ち戻りたい。はたして本稿をもってファンタジー作品としての〈ハリー・ポッター〉を評価できたといえるだろうか。答えは、否である。

しかし、本稿を通じて〈ハリー・ポッター〉には、まだまだ考察の余地があると考えらるにいたった。今後、さらなる論考を重ね、本シリーズの作品評価を試みたい。

なお、本稿は当シリーズにおける「呪文」の重要性と、その呪文のもつ「力」の一側面を論考するにとどまったが、言語学的側面から「呪文」の機能をさらに追及すること、また、比較対照として、「呪物」のもつ力などを考察することが必要であろうと考える。まずは、これらを今後との課題としたい。

1 Yolen, Jane. *Touch Magic — Fantasy, Faerie & Folklore in the Literature of Childhood*. Arkansas: August House Publishers, 2000. 79.

2 〈ハリー・ポッター〉では、「魔女」を指すことばとして「邪悪な存在」という意味を含む “witch” も使っている。ただし、本シリーズでは wizard と witch

は性差を表すためだけに使い分けられている。したがって、本稿では、wizard は witch を含むものとして論じていく。同様に、「魔法使い」ということばは、「魔女」を含むものとして使用していく。

- 3 グイリー、ローズマリ・エレン『魔女と魔術の事典』、荒木正純、松田英（監訳）、原書房、1996年、86-87。
- 4 キャヴェンディッシュ、リチャード『魔術の歴史』、梶正行（訳）、河出書房新社、1997年、7。
- 5 キャヴェンディッシュ、前掲書、p.15
- 6 ル＝グウィン、アーシュラ『夜の言葉』、山田和子（訳）、岩波書店、2006年、41。
- 7 Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury, 1997. 51.
- 8 ル＝グウィン、アーシュラ・K『影との戦い——ゲド戦記I』、清水真砂子（訳）、岩波書店、1976年、70。
- 9 ドイル、デブラ、マクドナルド、ジェイムズ・D『サークル・オブ・マジック 1——魔法の学校』、小学館、2007年、67-68。
- 10 Rowling, J. K. *Harry Potter and the Order of Phoenix*. London: Bloomsbury, 2004. 253.
- 11 *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 102.
- 12 プロップ、ウラジーミル『魔法昔話の起源』、斎藤君子（訳）、せりか書房、1983年、169。尚、ここでプロップは、「呪術的援助者は、主人公の力と能力の現れ」だとしている。魔法界の「もの」については、ホグワーツという画一的な教えを施す教育機関で、生徒たちが一斉に扱いかたを学んで使用するものが多いため、外在化された個人の力や能力だとは考えない。むしろ、魔法族全体の力と能力の現れだと言えるであろう。個人的に使用する「もの」についても、ひとから受け継いだり、貸し借りが可能なものが多いため、これらも「個人」に付随するものというよりは、魔法界の力の賜物と考える。
- 13 Hopkins, Lisa. 'Harry Potter and the Acquisition of Knowledge'. Anatol, Giselle Liza ed., *Reading Harry Potter: Critical Essays*. Westport, Connecticut: Praeger, 2003. 28.
- 14 ここでは、ハーマイオニーが薬草学を真面目に勉強していたことが役立ったことや、ハリーがクイディッチで磨いた箒の技を活かしたことを例として挙げている。
- 15 Lewis, C.S. *The Abolition of Man*. New York: Harper One. 1944c. 77.

- 16 Jacobs, Alan. 'Harry Potter's Magic'. *First Things: A Monthly Journal of Religion and Public Life*. January, 2000
<http://www.leaderu.com/ftissues/ft0001/reviews/jacobs.html> (2009年7月25日取得)
- 17 *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 95.
- 18 ホブキンスはhogwartsの図書館が作中で中心的な役割を果たしていることに着目して、本作品が「知識を重んじている」ことを主張している。
- 19 *Harry Potter and the Order of Phoenix*. 362.
- 20 ギイリー、前掲書、186。
- 21 <ハリー・ポッター>における呪文は、必ずしもことばを伴わなくてはいけないということではない。ダンブルドアをはじめとする大人の魔法使い・魔女は、ことばを唱えずに魔法を使っている。また、hogwartsの生徒は6年生になると、non-verbal spell (「無言呪文」) を学ぶ。しかし、ハリーが無言呪文を使うことはほとんどない。
- 22 ジョーンズ、ダイアナ・ウィン『大魔法使いクレストマンシー 魔法使いはだれだ』、野口絵美 (訳)、徳間書店、2001年、183。
- 23 *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 126.
- 24 オースティン、J・L『言語と行為』、坂本百大 (訳)、大修館書店、1978年、p.11
- 25 それまでは、何か発言をする (say something) ということは、何かを陳述する (state something) ことで、この陳述は「真」(true)、あるいは「偽」(false) のいずれかでなければならないというのが哲学的パラダイムであった。
- 26 オースティン、前掲書、164。
- 27 以下、文例についてはオースティン、前掲書、pp.175-176を参照。
- 28 オースティン、前掲書、200。
- 29 ここでは、オースティンの理論を普遍性のあるものとして取り上げるのではなく、「<ハリー・ポッター>における呪文」のありかたを解釈するのに有用なものとして援用する。
- 30 *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. 867-868.
- 31 野家啓一『言語行為の現象学』、勁草書房、1993年、159。
- 32 野家、前掲書、162。
- 33 Dickerson, Matthew. & O'Hara, David. *From Homer to Harry Potter*. Michigan : Brazos Press, 2006. 242.
- 34 キャヴェンディッシュ、前掲書、13。

- 35 「選ばれしもの」とは、ヴォルデモートの宿敵として選ばれてしまったハリーを指すことばで、作中で使われている表現である。
- 36 シュヴァリエ、ジャン、ゲールブラン、アラン『世界シンボル大事典』、金光仁三郎他（訳）、大修館、1996年、「杖」(wand, baguette)の項目を参照。
- 37 *Harry Potter and the Order of Phoenix*. 891.
- 38 *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2008. 64.
- 39 *Harry Potter and the Deathly Hallows*. 577.
- 40 Armitstead, Clair. 'Wizard, but with a touch of Tom Brown'. *Guardian Unlimited*. Archive, July 1999
<http://www.guardian.co.uk/books/1999/jul/8/costabookaward.uk> (2009年7月25日取得)